

○女島 の 海 藻 (一木 明子*) Meiko ICHIKI: On the marine algae of the Meshima Island, Nagasaki Pref. in Japan.

女島は長崎県に所属し、五島の西南約80kmの海上に浮ぶ男女群島最南端の小島で、東経128°20'北緯32°に位置する(第1図)。

九州本島の南西に散在する南西諸島並びにそれに隣接する島々の海藻に関しては、鹿児島大学水産学部の田中剛教授によつて漸次調査研究が進められているようであるが、男女群島に関しては未だ同博士の調査された由を聞いていない。

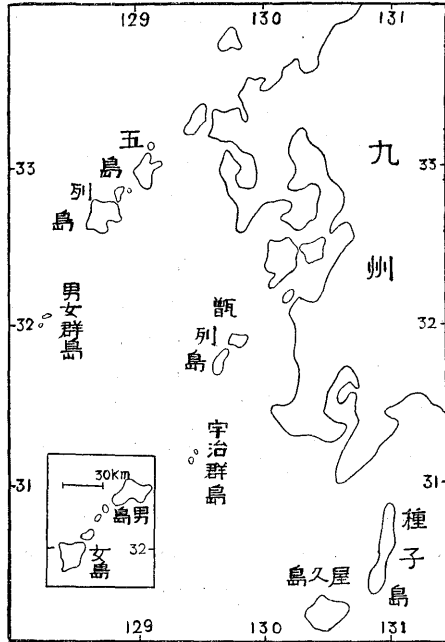
しかるに、1954年4月15日より5月18日まで、たまたま女島の魚類調査の滞在された九大・農・水産学教室・道津喜衛・水戸敏・中原官太郎の三学士によつて採集された海藻材料の供与を受けた。これら海藻材料は、すべて磯採集によつて得られたもので打ち上げその他の方法によつて得られたものは1種もない。この点は分布を考察する資料として適当であると思う。なお、材料はすべてホルマリン海水に保存されてあつた。

研究の結果未定の種も若干あるが、合計41種が知られた。その内訳は、緑藻12種、褐藻7種、紅藻22種であつた。以下にlistしたいと思う。中に *Vanvoorstia coccinea* 等7種の亜熱帯性の種類も含まれている。終始懇切な御指導を下さつた九大農学部瀬川宗吉助教授及び材料を提供して下さい下さつた前記三学士に対して深く感謝の意を表したい。

CHLOROPHYCEAE 緑藻類

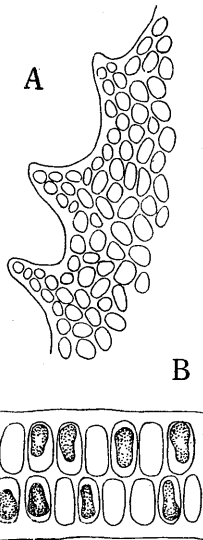
Ulva spinulosa Okamura et Segawa

瀬川(1936)の type specimen に類似して高さ2~3cm位の小さい材料であつた。その構造も似ていて2つの細胞層間が第2図Bの如く密接している。そして縁辺には同



第1図 女島の縮図

* 九州大学農学部水産学教室瀬川研究室



第2図 *Ulva spinulosa*
A 体の縁辺 B 体の横断
(×320)

この種類については、岡村博士もまだ配偶子嚢の記述をされてないようである。“伊豆白浜, Nov. 7, 1937, Segawa”の材料で観察した結果、第3図のように紡錘形で、その付着する位置は胞嚢の頂端部から $\frac{1}{3}$ 位下方の壁に生じ、胞嚢に比して著しく小形、直径 $100\sim 225\mu$ 、長さ $370\sim 525\mu$ であった。なお、腊葉で観察した為雌雄の性別は明らかになし得なかつた。

Codium tenue Kützing イトミル

Codium intricatum Okamura モツレミル

PHAEOPHYCEAE 褐藻類

Dictyota dichotoma (Hudson) Lamouroux アミジグサ

Pachydictyon coriaceum (Holmes) Okamura サナダグサ

Dilophus marginatus (non J. Agardh) Okamura

フクリンアミジ

Dictyopteris undulata Holmes シワヤハズ

Colpomenia sinuosa (Roth) Derbés et Solier フクロノリ

Enderachne Binghamiae J. Agardh ハバノリ

Sargassum sp. ホンダワラ属の1種

図Aの如く明らかなる鋸齒が見られた。

なお、瀬川(未発表)によれば、伊豆産、ポタンアオサ及びびりボンアオサの幼時において、又 Setchell (1928)によれば、*Ulva lactuca* f. *lacunculata* (Kützing) Hauck においても見られているから、このような特徴を持つている材料を再検討する必要があると思われる。

Enteromorpha sp. アオノリ属の1種

Monostroma sp. ヒトエグサ属の1種

Dictyosphaeria cavernosa (Forsk.) Börgesen キッコウグサ

Cladophoropsis fasciculatus (Kjellman) Börgesen ミドリグサ

Boodleia composita (Harvey et Hooker fil) Brand

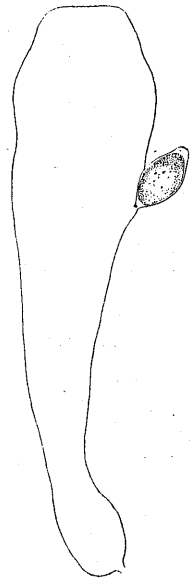
Caulerpa Okamurai Weber Van-Bosse フサイワツタ

Halimeda cuneata Hering ウチワサボテングサ

Codium adhaerens (Cabrera) C. Agardh ハイミル

Codium mamillosum Harvey var. *minus* O. S. Schmidt

タマミル

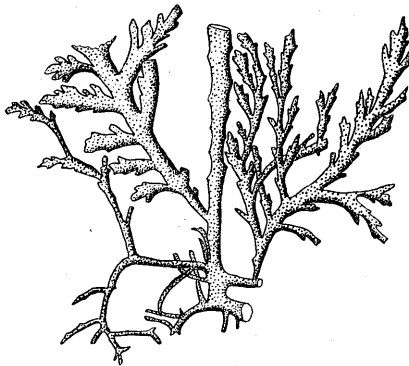


第3図 タマミルの配偶子嚢
(×60)

RHODOPHYCEAE 紅藻類

Porphyra suborbiculata Kjellman マルバアマノリ**Asparagopsis Sanfordtana* Harvey カギケノリ*Galaxaura fastigiata* Decaisne ガラガラ*Gelidium corneum* (Hudson) Lamouroux

この材料は始め *G. Kintaroi* (Okamura) Yamada ではないかと考えたのであるが、三重県立大学水産学部の瀬木教授に考定をお願いしたところ、多分上記の種類であろうとの回答があつた。同教授に感謝する。

Pterocladia tenuis Okamura オバクサ*Corallina pilulifera* P. et R. f. ピリヒバ*Jania adhaerens* Lamouroux タマモサズキ*Carpopeltis* sp. キントキ属の1種*Gloiopeltis complanata* (Harvey) Yamada ハナフノリ*Gloiopeltis tenax* (Turner) J. Agardh マフノリ*Rhodymenia intricata* (Okamura) Okamura マサゴシバリ*Champia parvula* (Agardh) J. Agardh ワツナギソウ*Acrosorium* sp.*Martensia denticulata* Harvey アヤニシキ*Vanvoorstia coccinea* Harvey カラゴロモ*Polysiphonia fragilis* Suringar クロイトグサ*Tolypocladia glomerulata* (Agardh) Schmitz イトクズグサ

第4図 ベニヤナギノリの体の下部 (×2)

この材料は、クロイトグサの枝叢の間に纏絡して僅かに断片が見出されたのみである。体の構造から推してこの同定は確実であると思われる。

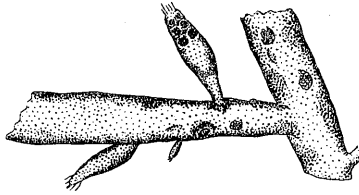
Chondria ryukyuensis Yamada

ベニヤナギノリ

採集品の中、幸に根を有する材料があつたのでこれについて略述すると、体は基部から多数の羽状の枝を出しておりその基部は錯綜しているが、その一部を示すと第4図のようであつて、直立枝は円柱状の匍枝状部から立ち、下部から出た

* この材料については、更に田中剛博士によつて本種であることを確認して戴いた。同博士に感謝する。

枝の幾らかは同じく円柱状で時に疎に羽状分岐を示す匍枝状となり、その先端が基質に附着し、その枝の一部の一つが正常な直上枝となつている場合が観察された。



第5図 モサヤナギの Stichidia (×20)

Chondria expansa Okamura モサヤナギ

この種類の生殖器官については、日本海藻誌でも“果実は知られず”と記述されているが、材料中に僅かながら第5図のような四分孢子囊をつけている枝を見出す事が出来た。即ち、stichidia は殆ど普通の小枝と一致する。

Chondria lancifolia Okamura

ササバヤナギノリ

Laurencia sp. ソゾ属の1種

Sect. Forsterianae 及び Cartilagineae に属するもの各々1種ずつ見出された。

〇オオバクロモジ (檜山庫三) Kôzô HIYAMA: *Lindera umbellata* Thunb. var. *aurantiaca* (Murai) Hiyama

オオバクロモジは、分布などの点を考慮すれば、クロモジから区別せずにおくのは妥当でないが、これをクロモジの品種と見るか変種と見るかについては必しも意見の一致を見ない。クロモジの仲間は種別が難かしいために、前にはかなり混雑していたらしく、C. S. Sargent の Forest Flora of Japan ではオオバクロモジが *Lindera sericea* となつているし、肝心の *Lindera umbellata* の方はカナクキノキを指したものととなつている。さて、このオオバクロモジをクロモジの変種と看做すと、村井三郎氏の岩手県基準帯植物目録(昭和10年)にキミノオオバクロモジというものが既に記載されているのでこれが考慮されてくることになつて、現行の学名は改変の要を生じてくるから、私はここにキミノオオバクロモジの学名を *Lindera umbellata* var. *aurantiaca* Hiyama と定め、またオオバクロモジには *Lindera umbellata* var. *aurantiaca* f. *membranacea* Makino の名を用うべきものであると考える。

Lindera umbellata Thunb., Gen. Nov. Pl. 2: 64 (1783) cum fig.; Kaempf. III. 2: 37 et 40 (1783); Fl. Jap. 145, t. 21 (1784).

var. **aurantiaca** (Murai) Hiyama, comb. nov.

Benzoin membranaceum var. *aurantiacum* Murai, Fl. Cent. Iwate 37 (1935).

Lindera umbellata var. *membranacea* f. *aurantiaca* Okuyama in Journ. Jap. Bot. 30: 40 (1955).

Nom. Jap. Kiminô-ôbakuromoji. Distr. Hondo borealis.

forma **membranacea** (Maxim.) Makino in Makino et Tanaka, Man. Fl. Nipp. 203 (1927), ut *L. umbellata* f. *membranacea*, comb. nud.

Lindera membranacea Maxim. in Bull. Acad. Imp. Sci. St.-Petersb. 12: 72 (1867).

L. umbellata var. *membranacea* Momiyama in Sci. Res. Ozegahara 440 (1954).